地球上自由人

神坂次郎

中公文庫

中公文庫

地球上自由人

定価はカバーに表示してあります。

1997年12月 3 日印刷
1997年12月18日発行

著 者 神坂次郎

発行者 笠松 巌

発行所 中央公論社 〒104 東京都中央区京橋 2-8-7 振替 00120-4-34
TEL 03-3563-1431(販売部) 03-3563-3664(編集部)

©1997 CHUOKORON-SHA,INC. / Jiro Kosaka

本文印刷 大日本印刷 カバー印刷 三晃印刷 用紙 王子製紙 製本 大日本印刷
ISBN4-12-203020-X C1193 Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

地球上自由人

神坂次郎

中央公論社

目次

はやりか行秀 7
異風いて候 33
山城守殿始末 59
ちょんまげ伝記 87
お馬は六百八十里 115
橋の上で 191
権兵衛の恋 217
ぽこぺん戦争 267
地球上自由人 295
初対面まで 山野博史 321

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

挿画　村上　豊

地球上自由人

はやりか行秀

1

関八州の荒々しい気候や風土のなかに生きる源氏武者の剽悍さは、

《親も討たれよ、子も討たれよ、死にぬれば（その死骸を）乗り越え乗り越え戦ひ候》

（『平家物語』）

という苛烈な戦さぶりをみればわかる。

西国の平家武者のように、親が討たれれば戦場から引きあげて喪に服し、子を討たれれば身も世もあらぬほど歎きかなしみ、

《夏は暑しと（戦さを）厭ひ、冬は寒しと嫌ひ候》

というのとでは、戦さへの心がまえがちがう。

剛強なのは武者ばかりではない。かれらを乗せた野そだちの悍馬もまた、激突した敵の馬に咬みつき、蹴り倒して暴れ狂う。

坂東武者の武芸の第一は、疾走する馬上から弓を引きしぼり、矢つぎ早やに射放つ〝騎

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

射〟であった。

雨のように飛来する矢のなかを、先陣を争い突進し、大音声でわが名を叫びあげ、群がる雑兵輩を射殺し蹴散らし、突貫していく。

武者たちの面目は、いかにおのれの名を飾り、壮烈なわが戦さぶりを、末の世の末の末までの語り草にするかということであった。

こうした、剽悍をもって鳴る武者のなかでも、

はやりか行秀

の勁悍猛烈ぶりは他を圧している。異名の〟はやりか〟というのは、心が逸る、勇み立つの意で、かは接尾語。『日葡辞書』（慶長八年、日本イエズス会のバテレンやイルマンたちが長崎で刊行したポルトガル語、日本語の辞典）によれば、逸り者とは、

《勇敢で大胆で、最初に襲撃（一番乗り）する武士》

だと説う。

ともあれ、この行秀、鎌倉殿（源頼朝）の有力御家人で、膂力無双。

弓を押したわめて弦を張るのに五人がかりだという五人張りの剛弓で十五束（約一メートル五十センチ）の大矢を放ち、一矢で武者三人を射殺したといわれるほど射術精妙。帝釈と名づけた栗毛の悍馬を駆って戦場を往来し、

「遠からん者は音にも聞け、近からん人は眼にも見給え、かく申すは下総国の住人、藤原秀郷（田原ノ藤太）が後裔、下河辺六郎行秀、われと思わん人々は寄り合えや（挑戦せよ）、寄り合えや」

と、虹のような気焔をあげている。そして名のある将とみれば馬を躍らせ、矢を射かけ一騎討ちを挑み、箙（矢を入れて背負う武具）の矢が尽きれば、鬼丸拵えの太刀を抜き放ち、一太刀、二太刀、火を噴くばかりの斬撃を浴びせ、駆け入りざまに得意の技で敵の鎧を蹴りあげ、

「うわっ！」

と仰向けに転落する敵を刺殺し、首を掻き斬り、血ぶるいをしている。

だが、にんげんの〝運〟などというのは、わからないものだ。運命は、かならずしも一定の運動律をもっているとはきまっていない。

この日の、行秀の場合が、まさしくそれであった。

建久四年（一一九三）二月……というから、現在から八百年ばかり前、源頼朝は下野国、那須野の原で大巻狩を催した。

すでに平家は西海に亡び、鎌倉幕府をひらいた頼朝の、武者たちの練武と、幕府の示威

をかねた巻狩であった。

このとき行秀は、幼馴染の江馬太郎（のち鎌倉幕府三代執権、北条泰時）と二人、頼朝に随従し、側近にいる。

那須五岳から吹きおろす冬の風のなかを、ぶなや楢の原生林のなかで勢子たちの喚声が湧きあがり、武者を騎せた馬の群れが、獲物を追って茅原を縦横に駆けめぐっている。

「見ろ！」

頼朝は、眼をかがやかした。

原生林の彼方から、土を蹴り枯野の原を跳び越え、巨大な角をふりかざした鹿が疾走してくる。

鹿といえば、頼朝自身、かつて大鹿と駆け並んで、その角をつかみねじり倒し、手捕りにして狩りの達人と評判されたほどの手練者である。

「行秀ゆるす、行け！」

頼朝の声に、

「さん候！」

行秀は、牽綱を切った猟犬のように突進した。

疾駆する馬の背に揺りあげられながら、行秀は矢をつがえ、きりきりと剛弓を引きしぼ

り、

ひょう！

と射放った。

だが、行秀不運。

その瞬間、ごろた石を踏んだ大鹿の体が、ぐらっと揺れた。

行秀の矢は、大鹿の頭上をかすめて飛び去った。

「これは！」

行秀は、わが眼を疑った。

それはそうだ。闇夜に飛ぶ蛍でさえも射落したほどのわが矢が、あろうことか眼前に迫った大鹿からはずれ、逸れ飛んでいったのだ。

次の瞬間、行秀の背後で、

「小山左衛門尉朝政、一矢まいる！」

その弦鳴りと同時に、咽喉首を篦深に射抜かれた大鹿が、撞！　と仆れる音がした。

「南無三宝！」

馬から跳びおりた行秀は、ずしりと熊のように坐りこみ、腰刀を抜いて、

「わが名、すでに朽ちたり！」

と、髻を切り落した。

ただならぬ行秀の気配を案じて江馬太郎が、馬を走らせて駆けつけたが、すでに遅かった。

ざんばら髪になった行秀は、鮒鯽魚が酢でも飲んだような面つきで、

「出家入道して乞食頭陀の行をもて、わが名をとぶらわん」

そう言い捨てると、江馬太郎が制めるのを振り払い、その場から逐電してしまった。

そののちの行秀の、

《その行方、さらに知る人なかりける》

と『北条九代記』にいう。

ちょっと書き忘れたが、〝はやりか〟という語には前述したような意のほかに、軽忽、軽躁、早とちりといった意味もふくまれている。

2

那須野の狩場から姿を消したにわか道心の行秀の足は、紀州高野山にむかっている。

当時、人の世に傷つき、憂き世を遁れて高野聖の群れに身を投じた男たちは多い。鎌倉武者たちのなかでも、一ノ谷の合戦で平家の若武者、平敦盛を手にかけた熊谷直実が、

のち所領争いの裁きで頼朝に忿懣を叩きつけ出家し、蓮生房を名乗って高野山内の熊谷寺に住む。

所領争いの不平から同じように入道した宇治川先陣で高名な佐々木高綱了智。その甥の虚仮阿弥陀仏こと佐々木信綱。

かれらの他にも、世の無情を感じ妻子をすて、遁世聖となり漂泊の旅にでた北面の武者、佐藤義清こと西行もいる。

世を捨つる人はまことに捨つるかな
捨てぬ人こそ　捨つるなりけり

（西行『山家集』高野の歌）

こうした高野聖のなかには、いかにも荒武者らしい痛快な行状の聖たちもいる。

《行住坐臥、西方に背をむけず》

と仏をあがめ、それを頑なにまもり、関東へくだるときも決して西には背をむけず、馬の鞍をさかさまにして馬子にひかせ、

逆馬の行人

とよばれたのは熊谷蓮生房だが、平家方では、平清盛の第三子宗盛の子の平宗親などは、平家滅亡ののち高野山にのぼり、

「もはや、この世にはわが尻をすえるほどの安住の地もない」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo